



# 日本のクマ牧場 2 0 1 5

2 0 1 5 Wild Welfareによる報告書

**著者:**

Georgina Allen : 人工飼育下の野生動物の福祉に関する10年以上の経験を有する動物学者であり、複数の動物福祉関係NGO及び動物園施設などでの仕事経験を持つ。現在はWild Welfareのプロジェクト責任者である。

Chris Lasher : 米国ノースカロライナ動物園の動物管理責任者であり、同州内の展示施設におけるクマの福祉状態の評価を実施してきた経験者である。

今回我々との意見交換に応じていただいた下記の方々に厚く御礼申しあげる、特に今回の視察旅行の準備、調整を請け負っていただいた坂元香織氏に深い感謝の念を表したい。:

坪田敏男博士、佐藤喜和博士（日本クマネットワーク）、山崎恵子（ペット研究会互）山口千津子獣医師（公益社団法人日本動物福祉協会）、阿仁クマ牧場関係者、及び秋田県庁のご協力に感謝申し上げます。また今回の視察に資金面でのご支援をいただいたHumane Society International及びYorkshire Wildlife Park Foundationに御礼申しあげる。

## Wild Welfareに関して

Wild Welfareは、動物園における動物福祉の問題のみを取りあげるために展示動物の福祉の専門家たちによって結成された、世界初の先進的組織である。我々は動物園に関する専門知識を駆使し、まず展示に対する初期の福祉評価を行う。その後、施設内の動物の福祉を向上させるためのみならず、施設自体の自然保護及び教育目的等に関する能力を改善するために、施設と共に維持可能な解決策を模索するための福祉問題に関する助言や研修を行う。我々の活動を、世界動物園水族館協会は全面的に支援している。また、それぞれの福祉問題に対して適切な対応をするための専門知識を提供するために、多くの動物園をパートナーとするネットワークを有している。



## 背景

日本には2種類のクマ、ヒグマ (*Ursus arctos*)、及びアジアクロクマ/ツキノワグマ (*Ursus thibetanus*) が生存する。日本最初のクマ牧場は1958年に北海道登別に開園した。現在は、日本全国で8つのクマ牧場が存在する(北海道4、秋田2、岐阜1、熊本1)。これらは主に観光施設であり、来訪者たちはクマの芸などを見物する。も

ともとこれらの施設は狩猟や開発のために親を失ったヒグマやツキノワグマの子どもを保護する場所として設立されていた。しかし、コグマたちが一般大衆に人気があることが判明し、その結果としてこれらの施設ではその後何世代にもわたり個体繁殖が収益事業の基盤となるコグマの供給源として積極的に行われるようになったのである。しかし、このような事業はその後まもなく管理困難な状況に陥ってしまうのである。クマは長命であり、比較的堅固な体質を有するために飼育環境が劣悪であっても生き延びることができてしまうが、そのために一部のクマ牧場では文字通り何百頭ものクマをコンクリートで固められた堅穴式の無味乾燥な飼育施設に押しこめることになってしまった。

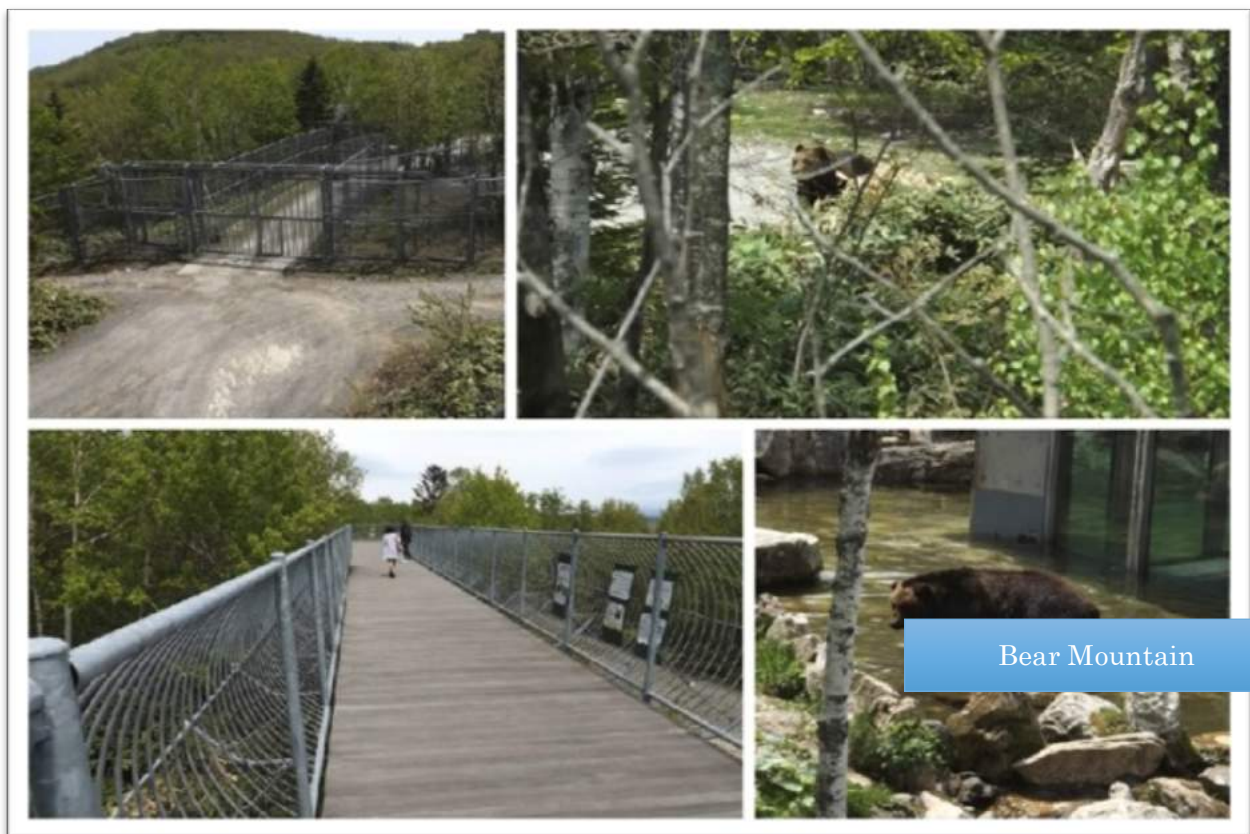
多くのクマ牧場では、来園者にクマに与えるためのペレット状の餌を販売しその購入を奨励している。これによって、その他餌や使用管理にかかる費用が賄われているようである。（世界動物保護協会/世界動物園水族館協会報告書2006）。年間来園者数20から30万人という大規模なクマ牧場（WSPA/WAZA報告書2006）、かつ家族連れなどに対するそのほかのアトラクションを有する施設にとっては、依然としてこのような事業は極めて大きな収益を上げるものとなっている。2005年にWAZA及びWSPAの代表者が共同で3施設の視察を行った。その結果、深刻な動物福祉の問題が存在することが露見したのである。肉体の裂傷、跛行、引きちぎられた耳、そして時には角膜の混濁や慢性結膜炎などの健康上の問題を引き起こす過密状態が常時見受けられた。飼育舎内は常に糞だらけであり、排水が悪く動物の体が汚染にさらされる状況であった。クマたちの餌の大半は来園者が投げ与える炭水化物主体のペレットであり、タンパク質不足が懸念された。（クマの成体はそれほどタンパク質を必要とはしないが、幼体には必要である）。環境を充実させるエンリッチメントはほとんどなく、その結果としてクマたちには無気力及び常同行動が見られ、さらに見物客が餌を投げる時には物乞い行動が見られた。クマの繁殖は実施されており、園側はそれが客寄せになることを認めていた。またクマに服を着せ自転車などに乗せるサーカス様のショーも行われていた。視察後に施設側に対して主な問題点の指摘及び改善策の提案が行われた（WAZA2005）。しかし2007年のWAZA、WSPA合同の再訪問の際には前述の提案の大半が施設側に検討されていなかったことが発覚した。2012年に、秋田県北部の八幡平クマ牧場にて囲いから逃走したクマたちによって職員2名が殺された。2015年初頭には、阿仁クマ牧場にて26頭のクマが死亡した。近年、日本の動物の愛護と管理に関する法律が改正されたが（2012年8月）その内容が今後のクマ牧場対策に影響を与える可能性もある。最近の調査によると現在稼働中のクマ牧場は8施設であるが、一般公開されていない施設がさらに3つある。



## 施設の状況

### サホロ・ベアマウンテン

以前、世界動物保護協会 WSPA、（現在はWorld Animal Protection、WAP）はオーストラリアでコアラの保護施設及び伊豆動物王国（日本動物園水族館協会会員）を所有する加森観光に、クマのサンクチュアリー（保護施設）を設立することを勧めた。その結果として、2010年にベアマウンテンが開設され会社が所有するもう一つのクマ牧場、登別クマ牧場から12頭のオスのヒグマがそこに移された。サホロ・ベアマウンテンはサホロスキーリゾートに隣接しており、その管理棟はスキー場のエントランスとの共有部分である。クマを見るためには来園者は施設に設けられている歩道橋式の遊歩道を歩く。クマと自然保護に関する小規模な展望エリアがあり、さらに「池」の前にはガラス張りの大きな展望台がある。また、クマの居住空間をのぞける窓も設けられている。また施設内の地上を約20分間装甲バスで巡ることもできる。



クマたちが置かれている居住空間はクマたちが歩き回ることができる完全な自然環境であった。植物や樹木がありさらにはクマたちが自由に活用することができる自然

の水源もおかれている。

水場は自然なもの及び人工的に作られたものなどがいくつかあり、それらはクマが完全につかることができる十分な水深のものであった。大きな人工池が一つ、展望窓の位置に設置されており、そこでは一頭のクマが飼育係に餌をもらっていた。この池には魚が放たれていたが、クマたちはその魚を捕獲することはないという説明を受けた。飼育係が池の水をホースでクマに散水していた（クマは自由にその場を離れることができる）。

遊歩道の随所には餌やり禁止の札が立ててあった。

観察できたクマたち（3頭）はすべて良好な健康状態にあるようであった。その中には観客の見物用に連れてこられていた6－8か月齢のアジアクロクマもいた。コグマには遊べるように玩具、ロープ、枝などが与えられていたが、小さな檻（2 x 3 m）に一頭だけで置かれていた。見物客が接触をすることは禁じられていたが、飼育係による給餌の見学は宣伝されていたようである。観察できたすべての個体は大木で背中を搔いたり、探索行動を展開させたり、水浴をしたりと自然な行動を展開させていた。常同行動は全く観察されなかった。無気力、うつなどを疑わせる行動も見受けられなかった。

人工池の前の展望窓のところには学習室もあり、質問などを受けてくれる飼育係が2名常駐していた。さらに施設内を四駆で巡回する職員も確認できた。施設全体の管理は行き届いているようであった。出入りする車両のために施錠された二重扉も設けられていた。

## 登別クマ牧場

登別クマ牧場は北海道の南、室蘭近郊に位置し市街地からはケーブルカーにてのアクセスがある。ベアマウンテンを所有する加森観光がこの牧場も所有している。加森観光はオーストラリアのLone Pine Koala Sanctuary (ZAAの会員)及び東海地方にある伊豆動物王国（日本動物園水族館協会会員）も所有している。

施設全体はかなり老朽化している。にもかかわらず入園料は高額である。アクセスがケーブルカーにて、という理由によるものとも思われる。

施設の展示は主として2つに分かれている。雄と雌の成体がそれぞれ2か所に分かれて展示されている。やや小規模な展示スペースが別途、幼体用に設けてある。これら

の展示に加え野外の円形劇場、「ダック・レース」用のアリーナ、そして先住民族文化の展示などが設けられている。公開展示には15頭のメス及び11頭のオスが置かれている（以前の調査では、公開されていない個体飼育設備が確認されたが、今回はそれらを見ていない）。施設にはさらに推定3-4か月齢のツキノワグマの幼体が置かれていた。2か所の主たる展示は100 x 150フィート（訳者注：1フィートは約30センチ）のコンクリートの堅穴式のものであった。ここに展示されている個体はすべてヒグマであった。床は全面コンクリート製であり、スロープ式の段々構造である。少数の池様の水たまりがあり、さらに上ることができる台付きの設備が若干おかれていた。飼育係の堅穴に対するアクセスは、はしごによってのみと見受けられた。また清掃されている痕跡はなかった。来園者はこれらの堅穴式展示を2方向から見物することができ、さらにどちらの展示にも鉄格子で覆われたのぞき窓に行くことができる地下道が設けられている。ここでは来園者が餌を購入し、腰及び肩の高さに設けられている2か所の餌入れに投入することができるようになっている



Noboribetsu Bear Park

クマたちはこの餌やりに馴化されている。見物人が入ってくるとすぐに反応を示す。たがいに對し攻撃的になり、常同行動および物乞い行動を展開させるのである。

小規模な円形劇場は依然クマのショーに用いられていた。しかしショーに使用されて



いたクマは現在は使われていない。劇場は今は使用されていないようである。また登別においてもコグマと来園者の接触は適切ではないと判断されたようであり、現在は行われていない

## 昭和新山クマ牧場

昭和新山も北海道南部室蘭近郊にある。同牧場は大型観光・商業地域の中に位置し、その周辺には土産店を含む多くの店舗が存在する。施設の展示設備はコンクリートの堅穴及び屋根付きの小型のコンクリート製の檻である（この檻にはアライグマも展示されていた）。大型の堅穴式展示は最大120 x 100フィートのものから最小40平方フィートまでである。屋根付きのコンクリートの檻は約30 x 20フィートの床面積である。成体及び若年（1 - 2歳）のクマたちは5つの主たる展示設備におかれている。また1年子用の檻が一つ、幼体用の檻が二つ置かれている。少なくとも7頭のコグマが観察されたが、その内訳は3か月未満4頭、そして4 - 6か月齢が3頭である。様々な年齢層のクマの存在により繁殖が続けられていることがうかがわれた。1000平米の囲いの中に15頭以上の個体が観察された。1年子の檻は全て正面が鉄格子になっており、格子の隙間からクマたちが物乞い行動を展開させているのが見受けられた。大きな土産店を通り抜け施設の入り口に到達すると、まず目についたのは木製のコグマの檻である。床面積約2平米のこの檻には、約3か月齢のコグマが4頭入れられている。檻の中にはエンリッチメントとなるものは何も置かれていない、寝藁などの敷物も全くない。成体用の2つの主たる囲いの中には、それぞれ上ることができる設備と小さな水場が一つずつ設けられていた。1年子が入れている展示には登れるものもは全くなく、設備と思われるものが一つだけ置かれている。1年子及びコグマの囲いの中には水源が確認できなかった。入口で販売されているビスケット状の餌を来園者がクマに与えているのは確認できたが、飼育係が給餌をしている姿、クマとかかわっている姿は確認できなかった。主に学童の集団からなる大勢の観客が歓声を上げながらビスケットを投げ入れ、クマたちをからかっていた。1年子は鉄格子の隙間から前肢を出し人の気を引こうとしていた。糞は形のない軟便であり、ビスケットが唯一の餌であることが推測される。

*観客の餌やりに伴い1年子が互いに攻撃的になるがそれをまた見物客が面白がりさらにおっているようである。*

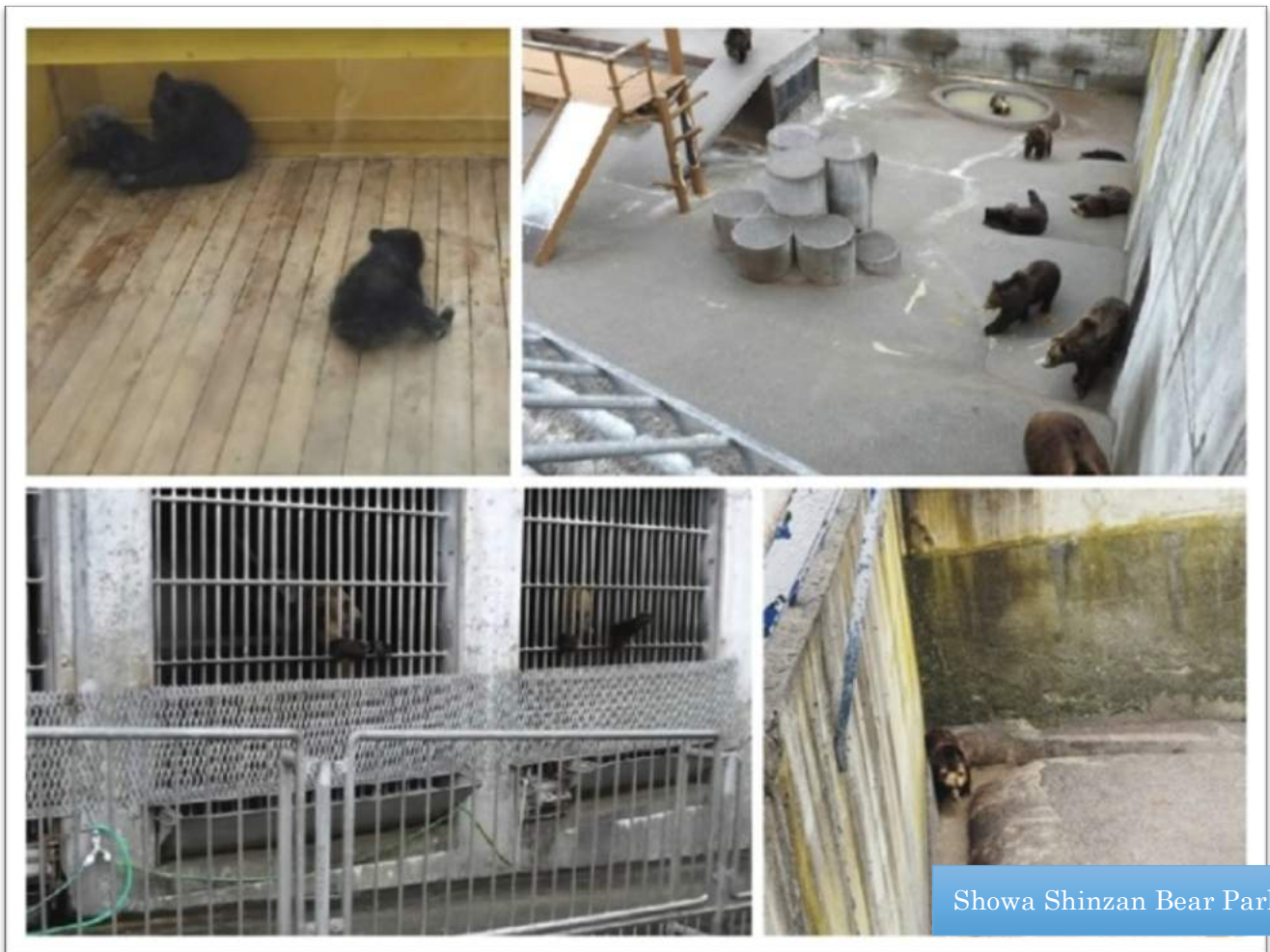
攻撃性のみならず、この若グマたちには檻の中を行ったり来たりする行動や扉やパイプをしゃぶる行動が見られる。成体の展示の中では最大の囲いにつながっている屋根付きの回廊である餌やり場に、クマたちは上ることができる。これは登別の施設と似たものである。回廊の壁面に設けられている管を通して来園者は餌をクマに与えるこ



とができる。成体間の攻撃はあまり見られなかったが無気力、うつ、及び常同行動が一貫して観察できる。クマの体の傷に重篤なものは見受けられなかった。また各個体の体重は比較的良好であると思われる。

しかし成体の多くはゆっくりとしたぎこちない歩き方をしている。おそらく関節炎などが生じているのであろう。

ショーが行われている様子はない。クマと来園者たちとの接点は餌やりとそれに伴うクマたちの物乞い行動のみ確認できた。物品販売は入場券売り場で行われていたがそこにおかれている商品の中にはbear creamがあった。（訳者注：馬油が宣伝されている主要商品であることからこれは観察者の誤解かもしれぬ）。



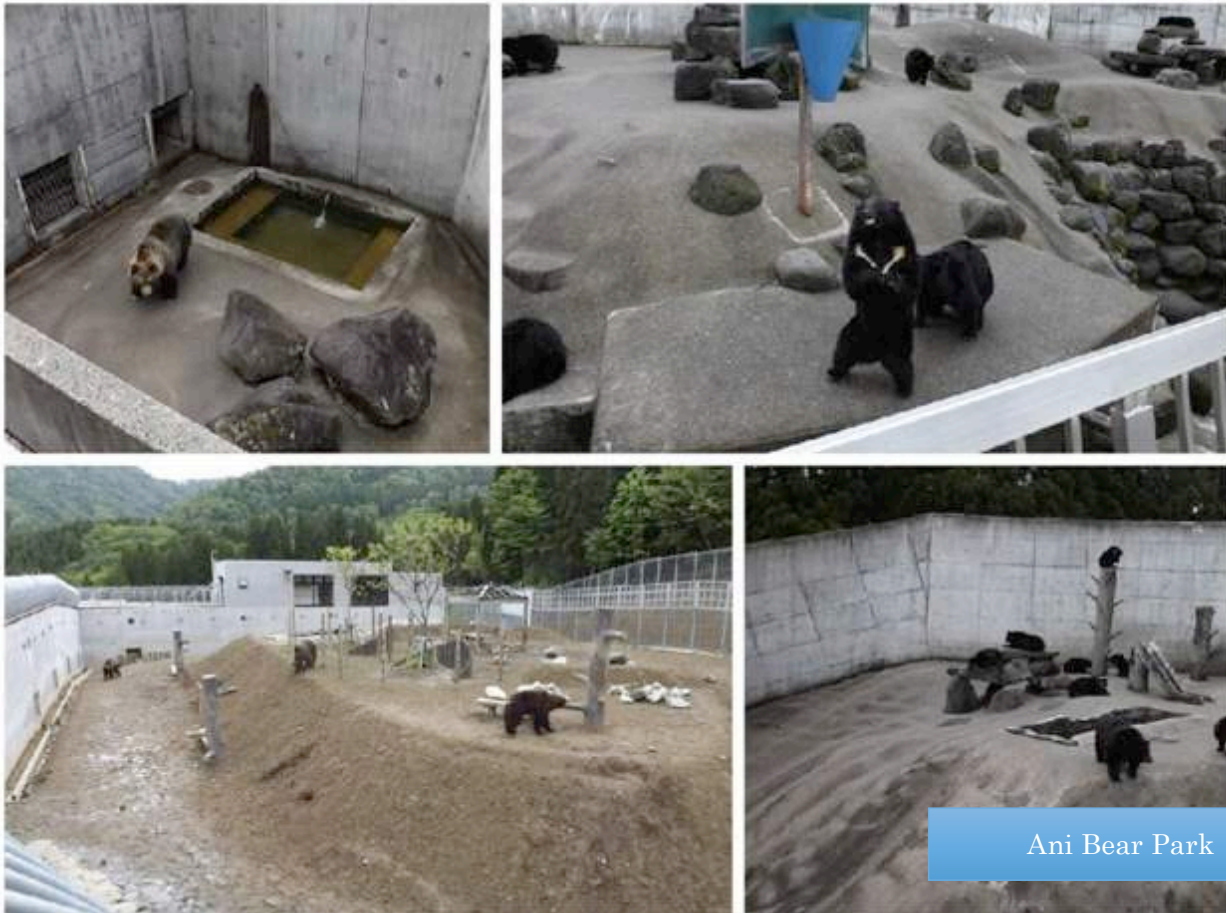
## 阿仁クマ牧場

この施設は秋田県北秋田市にある。2012年に同施設と同じ県内の八幡平クマ牧場にて、囲いから逃げ出したクマによって職員2名が殺されるという事件が起こった。この事件をきっかけとして八幡平クマ牧場は閉鎖され、そこで飼育されていたクマたちは阿仁に移された。6頭のツキノワグマが移された（その後2頭死亡）。またヒグマたちは全頭新たに設けられた専用の展示設備に移された。施設自体は人里離れた場所に置かれているが、ヒグマの展示のそばではかなりの音響で音楽が流されている。同牧場には現在ツキノワグマ40頭及びヒグマ16頭が飼育されている。ツキノワグマは主に2つの豎穴式展示施設に入れている。さらに1年子用に小規模な空間、そして30歳の雌が入れているより小さな空間が設置されている。主たる展示は両方とも広さがあり、かつクマが登れば視線を観客と同じ高さにする事ができる傾斜が設けられている。クマが登ることができる設備は、表面的なものではあるが一応設けられており、水場も小さいものが設置されていた。

来園者には餌やりが勧められているがその際に多くのクマが常道行動を展開させている。これらの行動には爪を引っ張る行動。物乞い行動、そして軽度の攻撃などが含まれている。

体には傷跡があり、これらはおそらく餌やりの際についてのものであろうことが推測された。一頭、左前肢の先端が切断されている個体が見受けられたが、この個体は野生から保護されたものであるという説明を受けた。別の個体の鼻腔に大きな裂傷が確認されたが、何らかの処置をされている様子はなかった。1年子の囲いは狭いと感じられるが、登ることができる構造がふんだんに設けられていた。この若グマたちにはすでに物乞い行動が見られる。ヒグマの展示は2014年に開設された。ここでは自然な環境を再現しようという努力がなされている（植物が少ないように見えたが、おそらくまだ新しいために樹木が育ちきっていないのであろう）。地面は自然の状態であり、見学は地上のガラス張りの観察窓もしくは上部に設けられた歩道から行うことができる。水場は2か所設置されており、観察中にクマたちがどちらも使用していた。

この展示ではクマたちが自然の行動を展開させることができる。同種間の遊び、木に爪を立てる行動、穴掘り、泳ぎ、そして採餌活動などが観察できた。



Ani Bear Park

クマたちが使用できる覆いも設置されている。しかし、展示に出ているクマは4頭のみである。クマたちが互いに喧嘩をすることを避けるために展示個体を回転させているようであるが、そのために大半のクマは室内に置かれているということになる。ヒグマに対する観客の餌やりは行われていないが、特別にそれが実施される場合もあると説明された。視察を行った年にはコグマは生まれていなかったが、1、2歳の個体がいることから繁殖が行われていることがうかがえる。ヒグマの繁殖は行われておらず、この展示は段階的に廃止されるという説明を受けた。施設には非常に良い教育実施設備が設けられている。そこでは子供たちにクマの生体保全活動に参加することが促されていた。

## 阿蘇カドリー・ドミニオン

この施設は九州南端の熊本県に位置する。施設自体は多くの建物や設備を有する。様々な活動が行われている中施設内のへりによる遊覧飛行や大音響で流されているBGMなどでかなりの騒音が蔓延している。5か所の隣接した区域に豎穴式の展示が複数おかれている。さらに頑丈な鉄の檻も並べられている。今回の視察で訪れた施設の中で最大級のものである。クマの飼育頭数は207頭であり、すべてがヒグマとツ



キノワグマであるが、1頭だけホッキョクグマが展示されていた。この施設にはクマ以外にも多くの動物が飼育されている。犬猫のふれあい広場、ペンギンショー、チンパンジーの展示、そして爬虫類やリスザル（これらは何もない床面がワイヤーメッシュの檻に入れられていた）などが確認できた。コグマを含め観客は大半の動物に触れることができる。施設内には3つの野外形劇場が設けられている。クマの展示の中央にはヒグマが置かれている。各展示には15-20頭の個体が入れているが、周縁的な小規模展示には1、2頭しか入っていない。暗く湿気が多い狭い室内に閉じ込められているクマたちが、檻に身体をぶつける音が常に聞こえてきた。このような狭いバックヤードに多くのクマが閉じ込められている様子であったが、何頭いたかは定かではない、中央の展示の周囲におかれた小規模な檻の中には、ヒグマ、そしてツキノワグマの成体及び1年子が少数の集団で入れられていた。約6平米の囲いの中には老齢のホッキョクグマが1頭入れられている。大半の展示には水場が置かれていたが、上ることができるような設備は幾つかの展示にしか設置されていなかった。水場（プール）は飲み水兼用のものであるが水は汚れていた。

コグマ用の展示は一つをのぞいては全てコンクリートで打固められたものであり自然の床材は一切用いられていない。

覆いが設置されている囲いも少ない。1歳未満のコグマが4頭確認されたが、1-3歳と思われる個体は沢山おかれている。確認されたコグマは全てツキノワグマである。飼育係たちはクマに与えるためのペレットやパンを積極的に来園者に販売している。1頭のヒグマが鶏肉を持っていたが、それが個体間の闘争を招いていたようである。この事態は観客を喜ばせるために意図的に引きおこされたものであることが疑われた。大半のクマに無気力、うつ、及び常同行動が見受けられた。餌の投げ入れのあるなしにかかわらず、クマたちには攻撃的行動が出現している。多くのクマに傷跡が見られた。

観察できたツキノワグマの大半（約9割と推測される）がひどいかゆみ、不快感、及び脱毛を伴う何らかの皮膚疾患に罹患している様子である。

体の脱毛が確認できたヒグマも何頭かいた。かなりの肥満個体は何頭かいたが、極端に痩せているヒグマが1頭確認できた。ホッキョクグマは異常な行動を展開させているが、極端な無気力状態も確認できる。薬物が投与されているか精神を病んでいるかどちらかであろう。この個体が置かれている展示スペースは狭く、何の設備もない殺伐としたものである。3つの円形劇場のわきには記念写真コーナーが設けられているが、ここでは来園者が服をまとわされたクマと記念撮影ができる。非常に人気のあるアトラクションである。ショーに関しては、クマはそのうちの一つにしか出演はしていない。しかしそのショーが中心的なアトラクションであるような宣伝がなされてい



る。少なくとも4頭のツキノワグマがサーカスのような芸をする凝った演出のショーが実施されている。これらのショーに出演するクマには引綱などの抑制手段は全く用いられておらず、観客のほうに自由に行くことができる状態であった。



Aso Cuddly Domain

## 福祉評価の方法論

視察団は大半の施設を一般の観客として訪れるようにすることが決定されていた。以前の視察には全て各施設の代表者との面談が含まれていたが、観光客として各園を訪れることによってその施設の真の姿をとらえることができると考えられた。このような形で視察を行うことには限界もあるが、「お勧めの展示」のみを見せられてしまうこともない。唯一の例外は阿仁クマ牧場である。同牧場は過去にも国際NGOなどと関わった経歴を持ち、我々の視察にも協力的であった。

2名の査察員がクマ及び施設の観察を実施し、その後観察記録をもとに評価表に記入をした（付録参照）。評価項目はこれらの園の以前の視察記録や人工飼育をされるクマの福祉問題として認識されているものなどを基に決められた。各項目は4段階評価で0から4までの点数が付く。さらに必要に応じてコメントなどの書き込みが行われ

る。項目に関する情報が入手できぬ場合には点数は0とされた。項目は以下のとおりである：囲いの広さ、種に適切な物理的エンリッチメントの設備、水（プール）へのアクセス、環境の騒音、食餌の質、シェルター（覆い、隠れ場所）と衛生管理、健康状態、行動、繁殖、エンターテインメント・観客との接触、獣医療、安全管理、飼養管理（職員、飼育員）。2名の査察員はさらに写真と動画による記録もとった。

## 視察結果

部類	ベアマウンテン		登別		昭和新山		阿仁クマ牧場		阿蘇カドリードミニオン	
	Inv1	Inv2	Inv1	Inv2	Inv1	Inv2	Inv1	Inv2	Inv1	Inv2
展示舎サイズ	4	4	1	1	0	0	0	1	0	0
エンリッチメント	4	4	1	1	0	0	1	2	0	1
水質(プール)	4	4	0	1	1	1	2	3	1	1
騒音	4	4	4	4	0	0	1	2	1	0
給餌	3	3	0	1	0	0	1	1	0	0
餌の質	3	4	0	0	0	0	0	0	1	1
シェルター、衛生	4	4	0	0	0	0	0	1	0	0
健康	4	4	1	1	1	1	2	2	0	0
行動	4	4	1	1	0	0	1	1	0	0
繁殖	4	2	3	2	1	1	2	3	1	0
娯楽・接触	4	4	2	1	3	3	2	3	0	0
獣医療	0	0 NK	0 NK	0 NK	0 NK	0 NK	0 NK	0 NK	0 NK	0 NK
			NK*							
安全	4	4	3	4	3	3	2	4	1	1
動物管理（スタッフ）	3	4	0	1	0 NK	0 NK	1	3	0	0
合計	49/56	49/56	16/56	18/56	9/56	9/56	15/56	21/56	5/56	4/56
平均	6		49	17	9	18	4.5			

\* 獣医療の提供は確認することができぬ場合もあり、その情報が手に入らぬ場合には0がつけられた。他の4施設と比べ、ベアマウンテンは例外的に飼養管理の水準が高く下記の考察の中には含まれていない。

### 展示（囲い）の規模及び設計

大半の展示はエンリッチメントとしてクマが登ることができる設備などを全く置か

ぬ、もしくは最低限のものしか設置をしていない殺伐としたものであった。爪とぎ用の柱などもまばらであった。大半の展示は竪穴式で上部から観客がのぞくようになっており、クマたちが人目を避けて隠れる場所が全く設けられていない。おかれた環境を自ら制御することができないこのような状況は、クマにとっては極めて大きなストレスの原因となる。特に狭い環境で過密状態に置かれているクマたちにとっては、展示の中に必ず隠れ場所や覆いを設けるべきである。また、大半の展示においては水場は小さなプール一つであった。展示内に置かれている個体数を考えたらこれは不十分である。暑い季節には体を冷やすために、さらに水浴をするためにクマが体ごと入ることができるようなプールはかならず設けなければならない。

*自然は植物・樹木、エンリッチメントとなる設備、適切な水場等の欠如、そして囲い内の過密状態が視察した大半の施設のクマたちに取って重篤な問題である。*

唯一の例外が阿仁クマ牧場の新しいヒグマの展示であった。ここの地面は土であり、プールが2か所、クマが隠れることができる覆いが設けられていた。短時間の観察では両方のプールが遊びと水浴に活用されている様子であった。

## 食餌及び栄養状態

全ての施設において観客の餌やりが奨励されていた。そのための袋詰めが園内もしくは入場口で販売されていた。餌は眼下のクマに直接投げ入れるか展示に設けられている地下通路などに設置されている餌入れようの管などに投入することができる。売られている餌は主にビスケット状のものであり、来園者がクマに与える量は全く管理されていない。

*このような無差別の給餌が実施されているためにクマ間の攻撃行動、観客に対する物乞い行動やその他の常道行動が強化されてしまっている。*

観客が投げ入れるえさに加え、当然、補完的な給餌が行われていることは推測できるが（クマの体重を見れば明らかである。用いられている餌の栄養価があまり高くないことは明白である。糞は柔らかく形がないものであり十分な繊維質が摂取されていないことがわかる。さらにはタンパク質や必須ビタミンなども不足しているようである。栄養素が不十分である不適切な食餌内容のために眼、皮膚。及び運動機能などを含む健康問題がクマたちに生じていることが推測される。給餌の際のエンリッチメント（餌を隠したり、給餌方法を変化させたりする）はクマが置かれている場所自体が変化に乏しいゆえに実施することは不可能である。また給餌の際に用いられる道具をさせている様子もなかった。単純に管に食べ物を詰めたり、餌入りの氷の塊を与えたりするだけでも給餌を用いたエンリッチメントは可能であり、

特に若年時代からこのような方法を活用していけば常同行動や攻撃性の出現を減少させることもできるのである。

## 健康状態

クマたちの一般的な健康状態は極めて低いと思われた。ほとんどのクマたちの体重は平均値から肥満の間にあったが、例外は阿蘇カドリー・ドミノオンにいた1頭のやせ細った個体であった。体毛の状態はそこそこであったが、カドリードミノオンだけにおいてはツキノワグマの約8割の皮膚の状態が悪く、クマたちは体をかきむしり体毛が禿げた状態になっていた。大半の展示は過密状態にあり水場へのアクセスも悪かった。体重が平均値を下回る痩せた個体が見受けられないということは、必ずしも生活環境が良いことを物語っているわけではない。クマは持久力に富んだ順応性の高い生物であるがゆえに、体重が平均値を下回る痩せた個体が見受けられなかったこと自体がクマたちが苦しみのない良好な生活環境におかれている事を物語っているわけではない。未処置の裂傷、片目の欠如、肥厚瘢痕などを含む負傷が観察され、健康状態の悪さのみならず獣医療の不足も示唆されている。

## 行動

過密状態、希薄な行動的エンリッチメント、適切な給餌による刺激の欠如などにより大半のクマは典型的な常同行動を展開させていた。

これらは囲いの中を行ったり来たりあるいはぐるぐると回る動き、頭を連続して壁に打ち続ける動き、そして観客による餌やりの際の物乞い行動や自傷行為である(爪を引き抜く、前肢をしゃぶる)。

また時にはクマが非常に攻撃的な行動を見せることがあった。常同行動を展開させていない時には、クマたちは無気力・うつ状態にあった。人工飼育下におかれたクマにしばしば心理的問題が発症する。その結果として異常行動が展開されるのであるが、このような行動はほとんどの施設で観察された。阿仁クマ牧場のヒグマの展示が唯一の例外であり、観察中には負の行動は全く見られなかった。クマの行動は非常に複雑であり、常同行動を含む異常行動の出現を防ぐために、それらの原因となり得る要素の理解と自然な行動のみを促す状況を提供することが必要とされる。今のところ、飼育下にあるすべてのクマたちにそれを何らかのかたちで実施しようとしている施設は無い。

## エンターテインメント及びハンドリング

昭和新山及び阿仁においては、観客と飼育係がクマに触れている場面には遭遇しな



かった。登別ではコグマを飼育係が乱暴に扱っていた。また昭和新山にもコグマ専用の展示が置かれていたところから、同じようなことが行われていることが疑われた。阿蘇のカドリー・ド、ミニオンにおいては、服を着せられたコグマと写真撮影を来園者ができるようになっていた。これは少なくとも一日一回開催されており、毎回一時間半実施されている。コグマは来園者の膝に乗せられていた。さほどきつそうではなかったが、口輪がコグマには装着されており子供たちはクマに触れるよう促されていた。また同園は唯一円形劇場でサーカスのようなショーを展開させている施設であった。

このショーにおいてはクマを含め色々な動物たちが滑り台を使った芸や玉乗り、綱渡りなどのサーカスのような出し物に用いられていた。

このようなショーは動物たちの尊厳を傷つけるものであり、彼らの存在を尊重する気持ちは全く感じられなかった。生体のニーズや自然な行動に関する情報は一切提供されることなく、純粋な娯楽としてショーが行われているのである。

## 飼養管理及び獣医療

視察中はあまり沢山の職員を目にすることはなかった。また、清掃や給餌などの飼養管理業務を実施している職員も少なかった。多くの展示は、はしごによってのみ飼育員がアクセスできるような設計になっている。展示内の清掃は主に放水により糞や食べかすなどを排水溝に流すという手段で行われているようである。職員たちがクマの管理に関する十分な知識と経験を有しているようには見えなかった。阿仁クマ牧場の管理者や飼育係は皆、クマの福祉に対する関心が高く、例えば冬場にはクマ舎の雪かきなどを実施すると話していた。しかし、観察する限りにおいては大半のクマたちに対しては専門知識に基づいた熟練者による飼養管理が実施されていないために、彼らがさらに苦しい生活を強いられるようになってしまっていることは明らかであった。今回の視察方法の限界でもあるが、どのような獣医療的ケアが提供されているのかを把握することは難しかったが、クマたちの全体的な健康状態から獣医療の提供は限られていることが推測される。特に個別別の治療に関してはそうであろう。

## クマの福祉・まとめ

過去においては、動物の福祉を守ることは恐怖などの負の体験を最小に止めることであるとされてきた。しかし最近新たな研究などにより、福祉の促進は適切な飼養管理で動物のニーズを満たすと同時に良好な体験をさせ、良好な精神状態を維持するという、より積極的な側面を持つようになった。

人工飼育下の動物の福祉は適切な給餌給水、隠れ場所などが向けられている適切な環境の提供、傷病の予防もしくは速やかな診断及び治療、正常な行動を展開できる機会の提供、そして負の体験の最小化などによって維持できるものである。

さらに良好な飼養管理体制を確立するには、動物のニーズに関する確かな情報と知識そして福祉の侵害を防ぐための種特有のその種のライフステージに応じた生物学的、生理学的知識が必要とされる。日本のクマ牧場の大半においては、以上の事柄が成立しているとは言えない。不適切な展示場の設計、エンリッチメントの欠如、そして基本的な飼養管理不足により何百頭ものクマたちが今もなお苦しみ続けている。

## 主な勧告

### 過密状態の解消

クマの健康状態を蝕んでいる主たる要因の一つは、囲いの中の過密状態である。このような状況がストレス、攻撃行動、そして負傷などを引き起こしている。阿蘇カドリー・ドミノオンだけでも207頭のクマが飼育されている。コグマは客寄せになるために繁殖は積極的に実施されている。しかしクマは長命であり、かつ強靱な動物である。そのために繁殖を続ければ園内のクマの頭数は増える一方である。ノースカロライナ動物園のTim Mengalによる2007年の報告では、阿蘇は当時の216頭から120まで個体数を減らす計画をしているということであった。やや減少はしたものの、8年たった今でもまだこの目標には到達していないようである。今回の視察ではこの目標に全力で取り組む姿勢は見られなかった。登別はベアマウンテンと所有者が同じである。ゆえに今後もベアマウンテンにクマを移しながら徐々に登別を縮小・閉鎖に持ち込むことを提案する。全ての施設において繁殖を停止し、自然にクマの頭数を減らしていくことを勧告する。

### 観客による餌やりを中止し給餌を通じたエンリッチメントを実施する

観客による餌やりは不自然な行動を生み出す。また、これによりクマの栄養バランスが崩れ適切な給餌の妨げとなる。さらに、新たなエンリッチメントとなるような給餌方法の機会を抑制する要因となる。観客による餌やりを徐々になくしていくと同時に職員、観客双方が新たな給餌道具の創造にかかわることを提案する。単純に管や松ぼっくり、紙製の卵の容器などにえさをつめたりするだけでも、給餌の際の

エンリッチメントの機会を提供できる。来園者には、クマに与える食材選びの機会を与えたり（果物、野菜、ピーナッツ等々）それらを与える方法を選択させたり（隠す、台の上に置く等々）さらには新しい給餌道具の開発に加わる機会を与えたりする新たな参加型のアトラクションを提供することもできる。このような来園者に与えられるインターアクション（交流）の機会も収入源とすることはできる、と同時に物乞い行動のような常同行動に歯止めをかけクマの福祉と健康に寄与することもできるのである。

## 構造的エンリッチメント

人工飼育下に置かれた動物は、環境を自らの選択によりコントロールすることができることによる恩恵を受ける。コンクリートのみに囲まれた環境や堅穴式の見下ろされる環境では、動物には選択肢が与えられない。すべての施設がより自然な「地面」及びクマが自然な行動を展開させることが促されるような構造的エンリッチメントを用意すべきである。爪とぎ柱、様々な高さの台、そしてハンモックなどはみな福祉を促進させる道具となる。クマが隠れることができる疑似隠れ家や太陽から逃れる覆いなども設けるべきである。嗅覚刺激はクマにとっては非常に大切である。そのために、新たな給餌道具に加え採餌行動を奨励するために香りのあるウッドチップなどを敷くこともよいであろう。自然の植物や土、砂などを一部に敷くことによって、クマはよりやわらかい地面に横たわることができる。

## サーカス型のショーを廃止し教育的資料やプログラムの提供を実施

展示施設では、サーカス型のショーで動物に芸をさせる必要はない。どのような訓練方法が用いられたのかも懸念される事柄であるが、不自然な行動を野生動物が見世物として展開させること自体、今日の社会にとっては何の価値もないことである。ショーを実施していたのは阿蘇カドリー・ドミニオンのみであったことは視察団にとっては心強いことではあったが、このショーはすぐに廃止することを勧告すると同時に、その他の施設においてもショーを今後行うべきではない。その代わりに野生のクマの生体保全を支え、人工飼育下のクマへの理解と尊重を育てるような教・解説プログラムの設置を提案する。阿仁クマ牧場には良質なインタラクティブ型の教育センターが設けられており、ほかの施設にはぜひ見習ってほしい。

## 迅速に必要な獣医療

大半の施設においては、すぐさま獣医療的ケアが提供されなければならない（ベアマウンテンは除く）。前述したように今回の視察方法の限界により、どの個体が現在治療を受けているかをはっきり調べることはできなかったが、観察できた健康状

態を表す指標からすると、十分な獣医療が提供されていない様子がうかがわれた。また個体の栄養バランスが崩れていることにより細菌、カビ、寄生虫等による皮膚疾患に罹患しやすい状況がある。さらには囲いの狭さ、十分な水浴ができる清潔な水場の欠如などにより状況は悪化している。全体的な健康状態の悪化は、飼養管理体制の改善と同時に治療していくことができるものである。

## 報告・アクション

Wild Welfareは、全ての施設の運営者に我々の懸念事項を明記した書簡を送った。彼等には同報告も渡すことも伝えている。どの施設も日本動物園水族館協会の会員ではないが、同協会にも同報告書は提出される。Wild Welfareはさらに、阿蘇カドリー・ドミニオンで飼育されている動物の福祉に関する懸念事項を伝える書簡を熊本県知事にも送っている。またベアマウンテンには、施設の方向性をたたえ支持を示すと同時に、登別を段階的に閉鎖することを支援する旨を伝える書簡を送った。Wild Welfareは今後とも各クマ牧場と会話を続け、我々の提案を受け入れるよう促すと同時に適切な資料等の提供を行う

視察旅行中に、我々は幾つかの日本の動物福祉NGOと会合を持った。これらの団体などがまだ十分ではない人工飼育下の野生動物の福祉に関するかわりをさらに発展させることができるよう協力をしていく所存である。同報告書は環境省にも情報提供として提出する。日本国内で人工飼育下にあるすべての野生動物の福祉を守るための法律や基準が設置されることにつなげるためである。施設と直接対話を続け、基準や法律の確立をめざし、日本国内の支援者がより大きな力をもって施設を変えていく事ができるようしていくことによって変化をもたらすことができるであろう。そして「悲しい施設」を変えていくための長期的な解決策を必ずや見出すことができると信じている。

分類・点数	0	1	2	3	4
展示舎のサイ(展示舎のサイズを観察する際に、スペースを計測するために展示舎1つにつきクマの数を書き留め	展示舎のサイズがクマ1頭につき10sqmより小さい	展示舎のサイズがクマ1頭につき10-100sqm	100-250sqm の狭い展示舎ではあるが、エンリッチメントが施されている	外の展示舎のサイズがクマ1頭につき 250 から 1000sqm の中程度、植生とエンリッチメントが施されている	展示舎のサイズがクマ1頭につき 1000sqm 以上の広い展示舎、半自然あるいは自然を生かしたエンリッチメント



ること)					
種特有のエンリッチメント施設	展示舎内にエンリッチメント示すようなものは見当たらない	垂直のスペース、床、プールなど全てのスペースを利用 少なくともクマが登るための1つのプラットフォーム、器具、掘るための柔らかい床、水を好むクマのためのプール	少なくとも展示舎内に4頭のクマに1つの種特有の器具 少なくとも1つのハンモックといった休息、睡眠のためのみのエリア	少なくとも展示舎内に4頭のクマに1つの種特有の器具 展示舎内に少なくとも1つのシェルター 少なくとも1つのハンモックといった休息、睡眠のためのみのエリア 柔らかい床材が観察される	少なくとも展示舎内に4頭のクマに1つの種特有の器具 展示舎内に少なくとも1つのトンネル 少なくとも1つの新奇な器具(揺れるタイヤなど)が観察される 半自然、植生的環境
水(プール)の利用有無	プール無し	小さなプール(水質を書き留める)プールのサイズ(4×4m)	プールあり(良い水質)	大きなプール(最低6×6m クマがもぐるのに十分な深さが観察される)	展示舎内で全てのクマが利用可能なプールがある
環境上の騒音の質	交通施設に近接、音響拡声装置、(施設内が)混雑状態	0 と 2 の中間	時折りの交通騒音、小規模の訪問者グループ、電気機器による騒音無し	2 と 4 の中間	自然音以外の騒音無し
給餌	飼育員による給餌が観察されず、訪問者による給餌のみ。クマ同士による闘争やそれに伴う負傷が観察される	飼育員による給餌と訪問者による給餌	エンリッチメント用の新奇の給餌器具を利用	1日中、エンリッチメント用の新奇の給餌器具を利用 給餌エンリッチメントのために展示舎を利用	エンリッチメント用の新奇の給餌器具を利用 給餌エンリッチメントのために展示舎を利用 闘争が観察されず、負傷も認知されない
餌の質	ペレットのみ	ペレットと異なる種類の餌(可能であれば餌の種類)	ペレットと異なる種類の餌(可能であれば餌の種類)	ペレットと異なる種類の餌(可能であれば餌の種類)	来場者による給餌なし 異なる種類の餌

		類を観察) 自由に水を飲む ことが不可能	類を観察) 若芽などが給餌 エンリッチメン トとして与えら れている 水を飲む機会が 限定的	類を観察) 若芽などが給餌 エンリッチメン トとして与えら れている 氷の塊やシロア リなどが観察さ れる	(可能であれば 餌の種類を観察) 若芽などが給餌 エンリッチメン トとして与えら れている 氷の塊やシロア リなどが観察さ れる 十分な量の自然 由来の餌が自由 に選択可能
シェルターと衛 生	コンクリート地 面、日光と雨に直 接暴露、不衛生 (ゴミ、排泄物)	0 と2の中間	シェルターの可 能性を持つ(1本 の木など) があ る土の 地面 適度に 清潔	2 と 4の中間	草の生えた土の 地面、十分に適切 なシェルターが 数か所あり、定期 的な清掃が行わ れている
健康(健康なクマ の割合を書き留 める)	負傷が見られる 体重が十分でな い、あるいは肥満 状態のクマが観 察される(数) 展示舎内の80% のクマが不健康 な状態	負傷が見られる 体重が十分でな い、あるいは肥満 状態のクマが観 察される(数) 展示舎内の60% のクマが不健康 な状態 排泄物が柔らか く形をなしてい ない	負傷が見られな い 50%のクマが不 健康な状態 排泄物はほとん どが異常	負傷が見られな い 40%のクマが不 健康な状態 わずかな例外を 除いてほとん どの排泄物が良い 形をなしている	負傷が見られな い 全てのクマが適 正な体重 全てのクマが十 分に健康 正常な排泄物
行動	攻撃性が観察さ れる 常同行動が観察 される 無気力や鬱状態 が観察される 自傷行為	0 と 2の中間	限定された攻撃 性 限定された常同 行動	自然な行動が観 察され、クマは自 然な行動を展示 舎内で発露可能 攻撃は観察され ない 限定された常同	自然な行動が観 察され、クマは自 然な行動を展示 舎内で発露 攻撃は観察され ない 常同行動は観察

				行動	されない
繁殖	多くのコグマが観察される(繁殖が全く制限されていないことが示唆) 妊娠中の母グマとコグマと共にいるクマが隔離されていない 訪問者との触れ合いやショーにコグマを使用している	コグマが観察される 妊娠中のクマが観察される 若いクマが隔離された展示舎に観察される コグマが訪問者との触れ合いやショーに使用されている	コグマや若いクマが観察されるが、繁殖は制限されている コグマや若いクマが訪問者との触れ合いやショーに使用されていない	適切な監督下やプログラムの一環としてのみ、繁殖が行われている コグマや若いクマが訪問者との触れ合いやショーに使用されていない 施設で展示飼養されている全ての動物が個体ごとに認識されている	繁殖なし 施設で展示飼養されている全ての動物が個体ごとに認識されている
娯楽、訪問者との触れ合い	頻繁なサーカスショーあるいは他の目的での利用	0 と 2 の中間	ショーは行われていないがペッティングや給餌、訪問者との触れ合いなどが動物の意思を無視して行われている	動物が自発的である場合にのみ、娯楽利用や触れ合いが行われる	娯楽利用、訪問者との直接のふれあいは無い
獣医療	獣医療あるいは医療施設が観察されない (クマの負傷を指針として利用)	0と2の中間	治療により獣医療が観察されたり、治療について伝えられる 獣医師が要請に応じて現場に派遣される	獣医療が観察され、動物管理の一部となっている 獣医師が要請に応じて派遣される	常駐獣医師がいるかあるいは常に獣医師による強力な支援がある
安全	訪問者が展示舎内のクマに非常に近づくことが可能であり、接触も可能。 限定的な安全手続きが準備され	0 と2 の中間	展示舎は安全だが、バリアや飼育員の安全性の証左が観察できない 限定的な安全手続きが準備され	3 と4 の中間	訪問者と展示舎間に直接の接触を防ぐ適正な柵が提供されている 望ましい展示舎内に動物を安全



	ているが、訪問者と近接な接触がある		ているが、訪問者と近接な接触がある		に収容する展示舎や柵がデザインされている
動物管理 (職員、スタッフ)	動物福祉に関する理解が全く無い(飼育員あるいは幹部職員) 動物が不健康であり、主に商業目的の運営	0 と2 の中間	動物福祉への適度な理解があり、クマのためのより良い状況創出に取り組んでいる	動物福祉への理解が十分あり、福祉基準の向上を目指して誠実に取り組んでいる (エンリッチメント)	十二分な福祉への理解があり、クマにとって最善の状況に焦点を当てている

## Bibliography

Mcalister, Ed. Jones, David (2005). Bear Parks in Japan.

Tim Mengel (2007) Bear Parks Report 2007, North Carolina Zoo/WAZA (unpublished)